

薩摩硫黄島の火山活動解説資料（令和2年12月）

福岡管区气象台
地域火山監視・警報センター
鹿児島地方气象台

薩摩硫黄島では、10月7日以降、噴火は観測されていません。

地震や微動の発生状況に特段の変化はありませんが、夜間に火映が観測され、時折噴煙が高くなるなど、長期的には熱活動が高まった状態が続いています。

火口から概ね1kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。また、火山ガスにも注意してください。

令和元年11月2日に火口周辺警報（噴火警戒レベル2、火口周辺規制）を発表しました。その後、警報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・噴煙など表面現象の状況（図1、図2、図3-①⑤）

硫黄岳火口では、10月7日以降、噴火は観測されていません。白色の噴煙が最高で火口縁上1,200m（11月：1,000m）まで上がりました。また、高感度の監視カメラで夜間に微弱的な火映を時々観測しました。

・地震や微動の発生状況（図3-②③⑥⑦、図4）

火山性地震の月回数は265回（11月：86回）で先月より増加しました。震源が求まった火山性地震は、薩摩硫黄島の東側海域でした。

火山性微動は、2020年9月15日以降発生していません。

・火山ガスの状況（図3-④⑧）

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、三島村及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1日あたり800トン～1,900トンでした（11月：900トン～1,200トン）。

・地殻変動の状況（図5、図6）

GNSS連続観測では、島内の一部の基線で、2020年7月頃からわずかな縮みが認められていましたが、その変化は鈍化傾向です。

この火山活動解説資料は福岡管区气象台ホームページ (<https://www.jma-net.go.jp/fukuoka/>) や気象庁ホームページ (https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php) でも閲覧することができます。次回の火山活動解説資料（令和3年1月分）は令和3年2月8日に発表する予定です。

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、東京大学、京都大学、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び三島村のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図 50mメッシュ（標高）』を使用しています。



図1 薩摩硫黄島 噴煙の状況（12月23日、岩ノ上監視カメラによる）

白色の噴煙が最高で火口縁上1,200m（11月：1,000m）まで上がりました。



図2 薩摩硫黄島 火映の状況（12月24日、岩ノ上監視カメラによる）

高感度の監視カメラで夜間に微弱な火映（白粹）を時々観測しました。

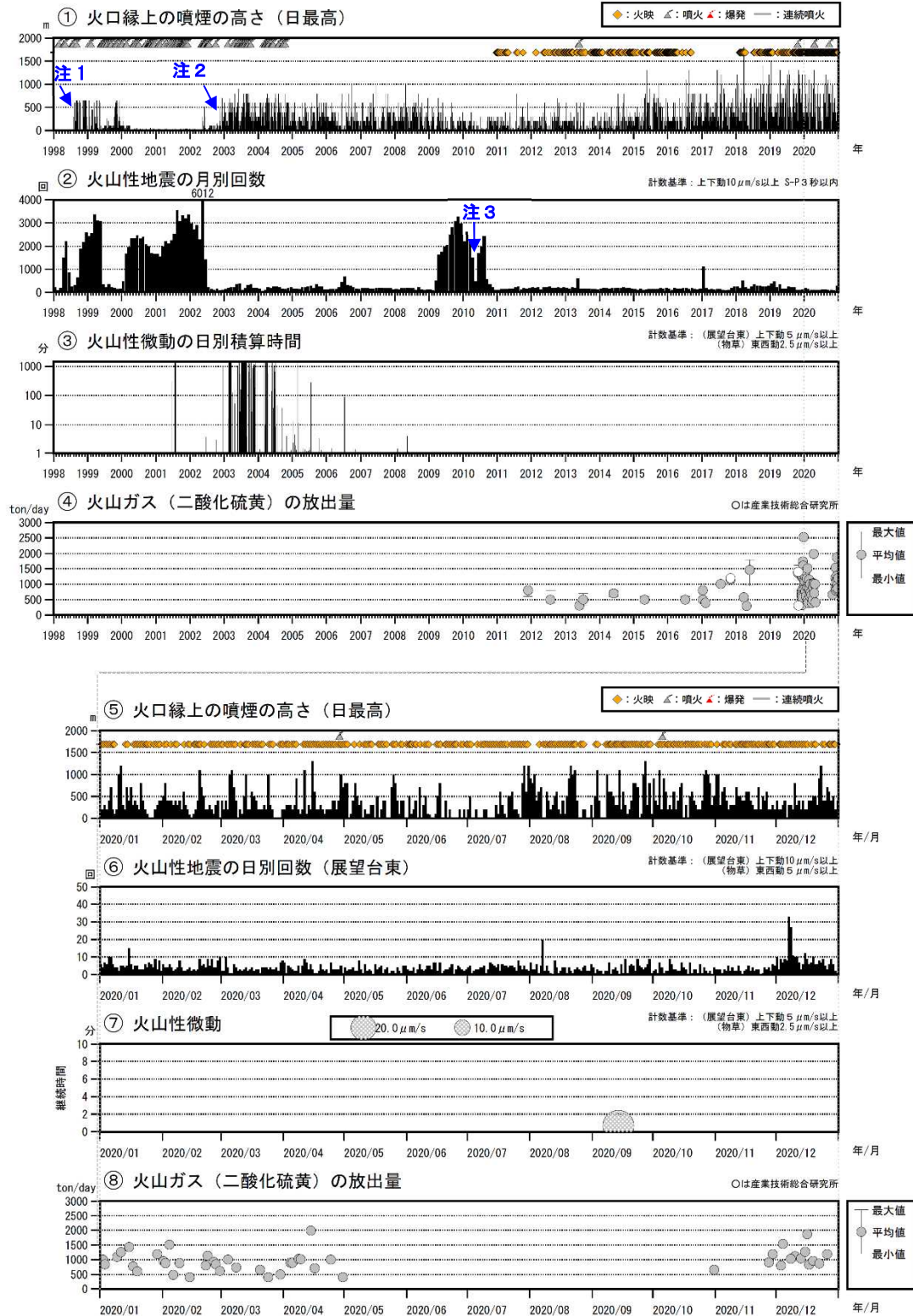


図3 薩摩硫黄島 火山活動経過図（1998年1月～2020年12月）

<12月の状況>

- ・ 白色の噴煙が最高で火口縁上1,200m（11月：1,000m）まで上がりました。
- ・ 硫黄岳火口では、高感度の監視カメラで夜間に微弱な火映を時々観測しました。
- ・ 火山性地震の月回数は265回（11月：86回）で先月より増加しました。
- ・ 火山性微動は、2020年9月15日以降発生していません。
- ・ 火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は1日あたり800～1,900トンでした（11月：900～1,200トン）。

注1 1998年8月1日：三島村役場硫黄島出張所から気象庁へ通報開始。

注2 2002年11月16日：気象庁が設置した監視カメラによる観測開始。

注3 2010年1月から7月にかけて、地震計障害のため火山性地震及び火山性微動の回数が不明の期間があります。

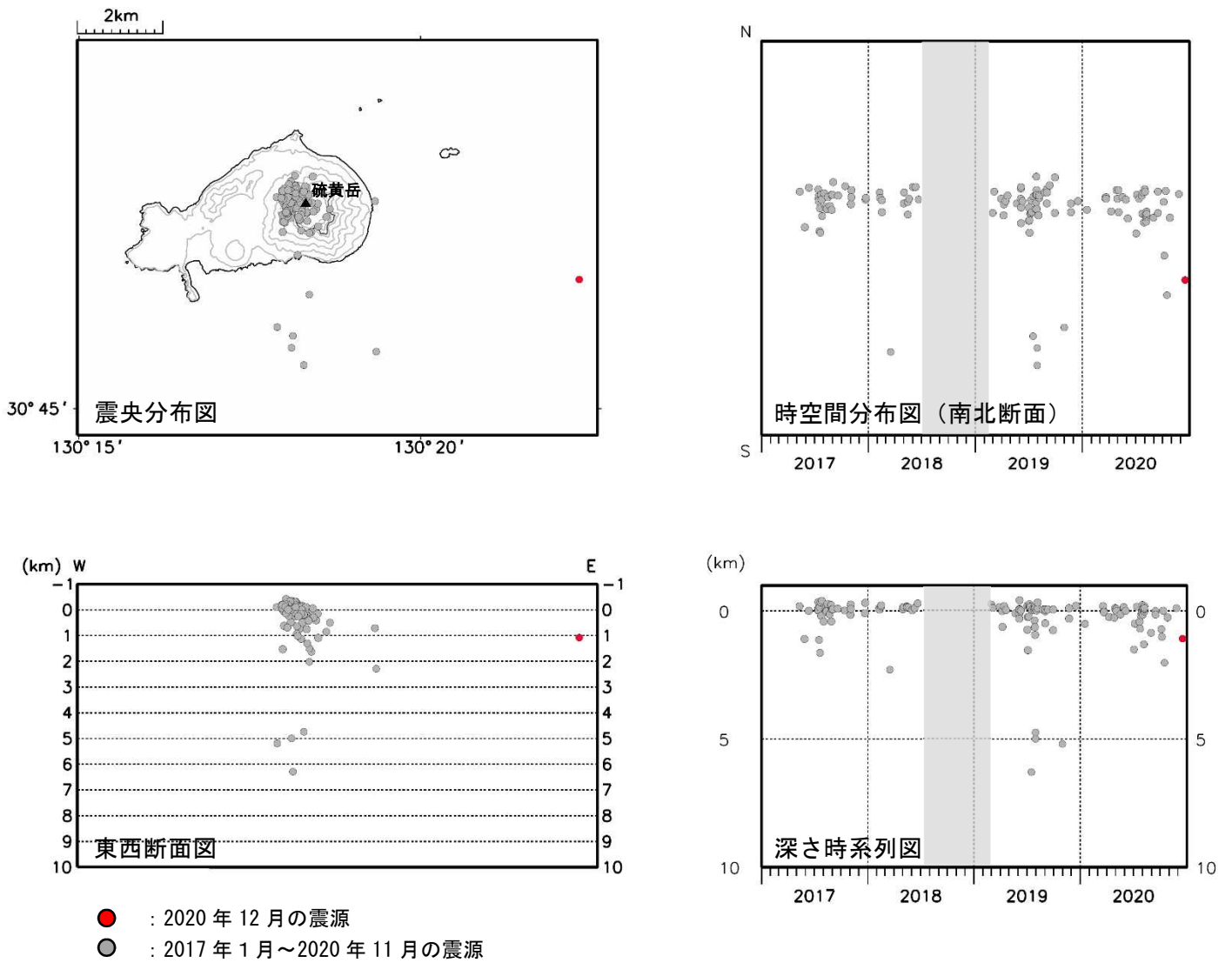


図4 薩摩硫黄島 火山性地震の震源分布図（2017年1月～2020年12月）

<12月の状況>

震源が求まった火山性地震は、薩摩硫黄島の東側海域でした。

地震計障害のため、2018年6月28日～2019年2月28日（灰色部分）にかけては震源が求まっていません。

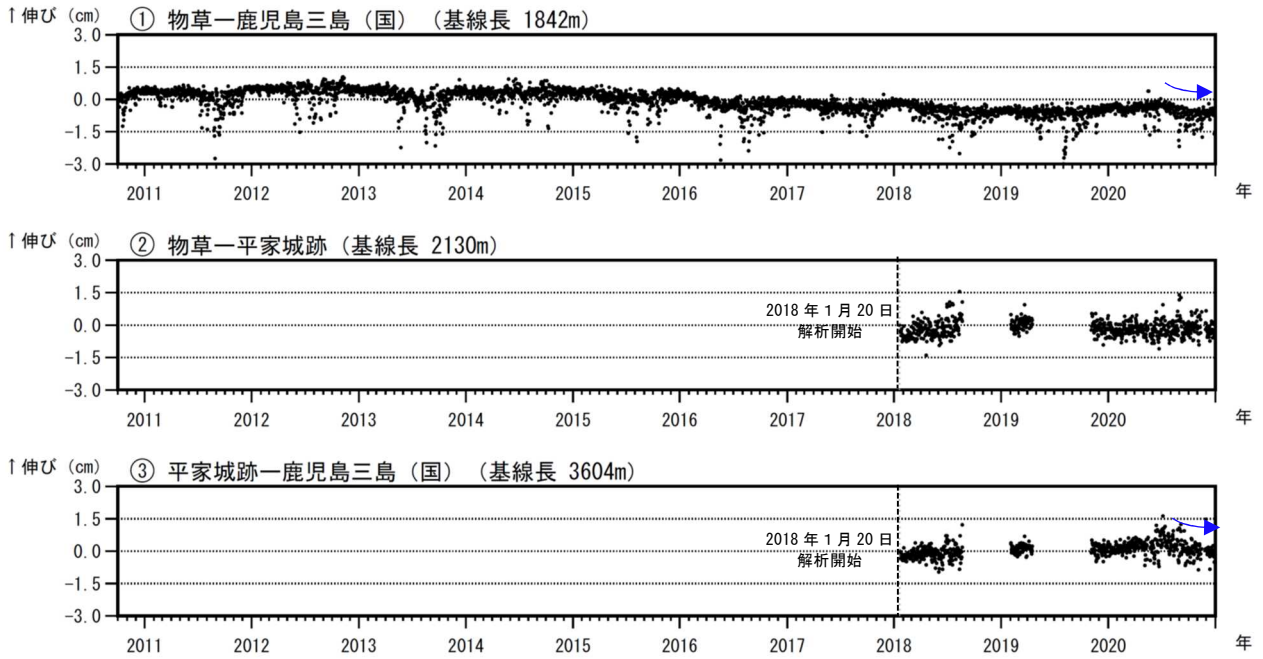


図5 薩摩硫黄島 GNSS連続観測による基線長変化 (2010年10月~2020年12月)

GNSS連続観測では、島内の一部の基線で、2020年7月頃からわずかな縮みが認められていましたが、その変化は鈍化傾向です。

この基線は図6の①~③に対応しています。
 基線の空白部分は欠測を示しています。
 (国) : 国土地理院

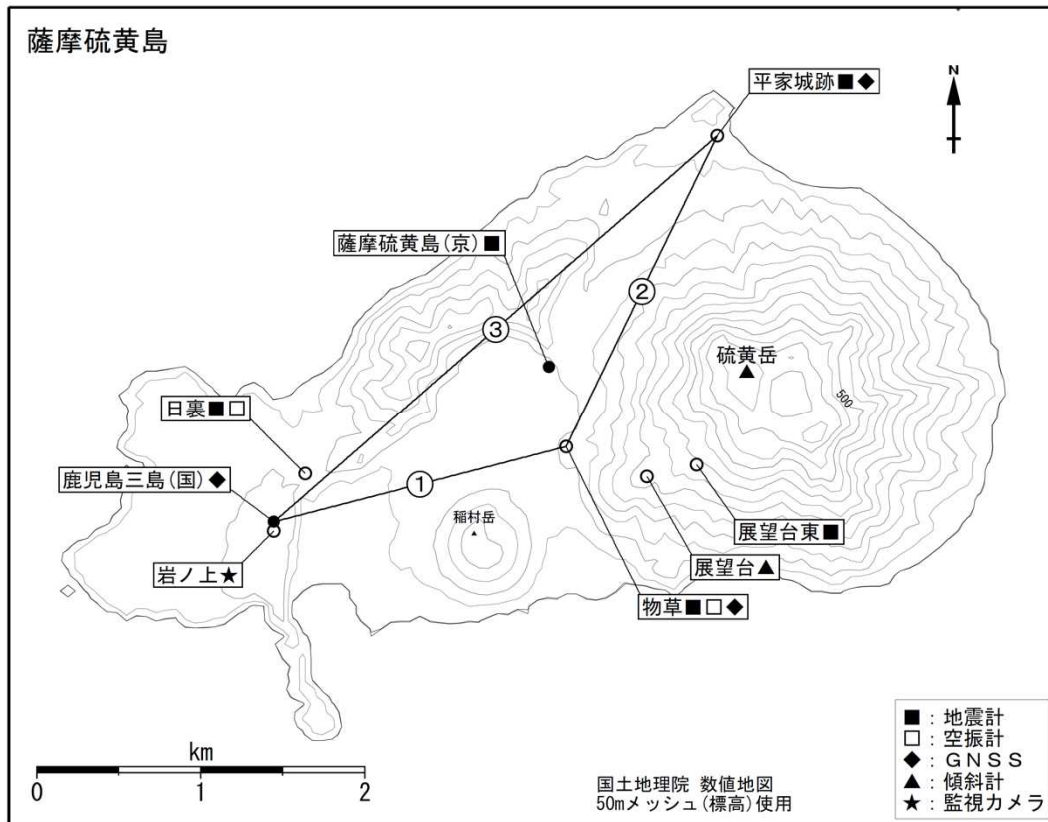


図6 薩摩硫黄島 観測点配置図

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
 (国) : 国土地理院、(京) : 京都大学